

「日本語教育実践研究 (5)」

小林 ミナ

要 旨

本稿は、日本語教育研究センターで開講されている「[わたしの]ほんご」プロジェクト1-2」という初級の日本語授業で行われた、「実践研究科目(5)」の実践報告である。オンラインでの実施に対応するべく、学期開始前も開始後もさまざまな変更や工夫を行った。その中でも、「振りかえり」のためにスライド教材を作成したことが、実習生の「学び」に大きく影響した可能性がある。

キーワード

「振りかえり」 スライド教材 LMS 関係性の構築

1. はじめに

「実践研究科目(5)」(以下「実践(5)」)は、本学日本語教育研究センター(以下「センター」)で開講されている「[わたしの]ほんご」プロジェクト1-2(以下「わたにほ」)という初級の日本語授業を教育実践の場としている。科目名称の末尾にある「1-2」という数字は、センターで設定されている8つの日本語レベルのうち、いちばん下の「1レベル」(≒ゼロ初級)とその1つ上の「2レベル」を対象としていることを示す。2020年春学期は、「わたにほ」もまた、オンラインでの実施であった。

本稿は、オンラインの初級日本語授業で行われた「実践(5)」の実践報告である。

2. 通常時のシラバスや授業運営

まず本節では、対面で行っていた通常時のシラバスや授業運営について述べる。2.1節では「わたにほ」を、2.2節では「実践(5)」を取りあげる。

2.1 「わたにほ」の概要

「わたにほ」の授業概要を以下に示す(Webシラバスから引用する。以下同)。

「教科書の日本語は、みんなが使っている日本語とちがう」「教科書には、私が見たい場面がない」と思ったことはありませんか。「わたしの]ほんご」プロジェクトは、「日本語で話したいこと/書きたいこと」「日本語がうまく使えなかった経験」を持ち寄り、「わたしの]ほんご」をたくさん増やしていく授業です。

図1 「わたにほ」の授業概要

「わたにほ」では、「自らの日本語での経験」や、「これから日本語でやってみたいこと」を持ち寄り、その状況で使われるさまざまな表現を学んでいくことを目指している。教科書を用いない、典型的な「後行シラバス (a posteriori syllabus)」の授業である。

1学期 (90分*15回) は次のようなスケジュールで進行する。

第1週	オリエンテーション	
第2週	自己紹介	
第3週	わたしの状況を見つけよう	
第4-8週	わたしの日本語(1)-(5)	} 「話す」
第9週	復習 I	
第10-14週	わたしの日本語(6)-(10)	} 「打つ」
第15週	復習 II	

図2 「わたにほ」の学期スケジュール

通常時は、第1週「オリエンテーション」のあとに履修者 (以下「学習者」) が確定するので、実質的な授業は第2週「自己紹介」からとなる。その後、第3週「わたしの状況を見つけよう」を挟んで、学期の前半 (第4-9週) は「話す」、後半 (第10-15週) は「打つ」を扱う。「打つ」を扱う後半は、1人1台のパソコンが使えるPCルームを使用することが多い。学習者は、毎学期30-35名である。

2.2 「実践 (5)」の概要

「実践 (5)」の授業概要を以下に示す。なお、副題として「「状況」のなかで言語とコミュニケーションを考える日本語教育実践」を掲げている。

日本語教育研究センターのテーマ科目として開講される「「わたしのにほんご」プロジェクト1-2」(水曜2限 (筆者注「10時40分~12時10分」)において、授業実践を行います。「わたしのにほんご」プロジェクト1-2」は、教室を「教室の外のコミュニケーションをメタ的にとらえ直す場」と位置づけています。学習者が「日本語で話したい/書きたいこと」「日本語で話したかった/書きたかったが、うまくいかなかった経験」などを持ち寄ることにより、自分らしいコミュニケーションを日本語で実現できるように、「文型」や「表現 (機能)」から出発するのではなく、「状況」のなかで言語とコミュニケーションをとらえる教育実践を目指します。

実践研究 (5) では、どうすればそのような日本語授業が実現できるか、そこで教師に求められる役割は何かといった点について、具体的な事例を踏まえながら考察を深めます。その際、とくに「学習者の発言や質問の背景を考える」「学習者の発言や質問に、どう反応すればよいか」に焦点をあてます。

授業の前半45分では、提出された振りかえりシートに基づき、その週に行った授業実践を振りかえります。

授業の後半45分では、次回の担当者から提出された教案の検討を行います。

授業時間以外にも、メーリングリストなどを利用した意見交換、および、教案や教材の検討を行います。

※この科目は主として実践的な教育が行われる科目です。

図3 「実践 (5)」の授業概要

院生は、このようなシラバス、および、第1週に行われるオリエンテーションを経て、「実践(5)」を履修するか否かを決める。履修を決めた者(以下「実習生」)は、図2の第2週「自己紹介」から「わたにほ」に参加する。第2週授業までは小林が担当するが、第3週「わたしの状況を見つけよう」以降は、毎回1人の実習生が主担当者となり、1回90分の授業をすべて担当する¹。これは、「実践(5)」の大きな特徴の1つである。

「実践(5)」は、次のような週スケジュールで進行する。

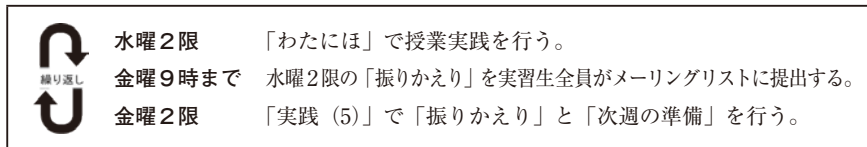


図4 「実践(5)」の週スケジュール

金曜2限の「振りかえり」の進めかたは、学期ごとに、主として実習生の人数によって異なる。実習生が少人数(3、4名)であれば、とくに進行役は定めず、自由にディスカッションを行う。5名以上の場合は、進行役を立てて進める。さらに大人数(10名前後)になると、進行役を立てるだけでは議論が錯綜し、うまく時間内に収まらないことがあるので、実習生から提出された「振りかえり」を参考に、教員があらかじめいくつかの論点をあげておき、それに従ってディスカッションを行うことが多かった。論点を整理したスライド資料を、教員が準備することもあった。

3. 春学期開始前に行った準備

本節では、オンラインでの実施に対応するべく、学期開始前に行った準備について述べる。3.1は「わたにほ」、3.2は「実践(5)」の準備である。

3.1 「わたにほ」のための準備

2.1で述べたように、通常時の「わたにほ」では学期前半に「話す」、後半に「打つ」を扱っていた。これは、まずは音声コミュニケーションで日本語に慣れ、そのあとキーボードやタッチパネルを利用した文字コミュニケーションに取り組むという流れを企図したためである。また、初級レベル対象ということもあり、通常時の「わたにほ」の履修者には「日本に来たばかり」「早稲田大学で過ごす初めての学期」という者も多い。学期の進行とともに、学習者の生活は広がりを見せ、日本語も日に日に変化し、豊かになっていく。しかし、今学期は、日本への渡航が叶わず、海外から授業に参加する学習者が一定数いることが想定され、必ずしも日本での生活やその広がりを前提にはできなかつた。また、すべての授業がオンラインであることから、「話す」よりも「打つ」が必要な学習者がいる可能性も考慮し、「話す」と「打つ」の順序を入れ替え、学期前半に「打つ」、後半に「話す」を扱うこととした²。

また、国内外を問わず、インターネットの接続環境が必ずしも万全でない学習者がいることが想定された。そこで、通常時は水曜2限の90分間をメインに組み立てていた授業デ

ザインを、**事前課題** → **オンラインセッション (水曜11-12時)** → **事後課題** という3部構成とし、仮にオンラインセッションにうまく接続できなかったとしても事前課題と事後課題でそれを補えるように工夫した。これらの活動には、すべて2020年度から全学的に新規に導入されたLMS (Learning Management System) であるWaseda Moodleを利用した。

3.2 「実践 (5)」のための準備

授業開始は5月の連休明けに延期されたが、履修登録は当初の学事暦通り4月初旬であった。研究科の入学式やガイダンスもオンライン (Zoom) で実施されたことから、とくに今年4月の新入生には、同期生、先輩院生、教員とオフラインでまったく顔を合わせる機会もないまま、履修する科目を決め、それぞれの場所で連休明けの授業開始を待つこととなった。

2.1節でのべたように「実践 (5)」は後行シラバスでデザインされており、第3週以降のすべての授業を、各回の主担当者を中心に実習生全員で協力しあって作りあげていかなければならない。そのためには、実習生の間に忌憚なく意見交換できる関係性が醸成され、コミュニティとして成立していることが重要である。

また、副題にもある「『状況』のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」というコンセプトは、「ロールプレイ」や「場面シラバス」と勘違いされることが多く、学期を通じて何度も質疑応答や意見交換が繰り返されるのがこれまでの常であった。そのためには実習生の間だけでなく、教員との間でも互いの教育観、言語観をぶつけあえる信頼関係が必要である。

そこで、授業開始を待つことなく、実習生8名と教員のメーリングリストを4月中旬に立ちあげ、自己紹介などのやりとりから始め、関係性の構築に努めた。また、授業コンセプトや授業運営に関する大学全体の動きなどを伝えるためのブログを、新たに立ちあげた。メーリングリストとは別に、わざわざブログを立ちあげた理由は、次の通りである。

「履修生への情報提供、履修生との合意形成」のために、学習者の様子、これまでの実践の内容、コースデザインの背景にある問題意識などを、できるだけ具体的に伝えていこうと思います。日本語教育を専攻する院生なのだから (だからこそ?)、院生には包み隠さずすべてを伝えること自体が、貴重なリソースになると考えた次第。将来、私と同じ立場に立つであろう人たちは。(中略) そして、舞台裏を伝えるために、なぜメールではなくブログにしたかという、そのほうがストレスなく見てもらえると思ったからです。日記の意味はあまりなく「項目ごとに、時系列にまとまった内容が並んでいる」という特徴を利用しています。

図5 4月21日のブログ記事「そうだ、ブログ、立ちあげよう」より

なお、授業が開始されてからのやりとりはLMSに一本化し、メーリングリストは緊急対応のみに用いた。

4. 授業期間中に起きたこと

この春学期は、担当教員である私にとっても試行錯誤の連続であり、たくさんの新しい気づきをもたらしつつも、めまぐるしく過ぎていった。そのすべてを記すことはできないが、ここでは金曜2限の「振りかえり」のために、担当教員が作成したスライド教材について取りあげたい。

今学期の実習生は8名であり、「振りかえり」もオンラインでの実施となったため、金曜2限の進行については、これまで以上に教員が関与したほうがよいと判断した。そこで、実習生が当日の金曜朝9時までにLMSの「フォーラム」に提出する「振りかえり」を踏まえて、教員が事前に論点を抽出し、メタ的な観点からカテゴリ化した。そこに、解説や関連文献などの情報を加えたスライド教材を作成し、10時までにLMSの「授業コンテンツ」にアップすることとした。実習生は当日10-11時の間にスライド教材に目を通し、質問や意見をまとめておき、11時からの「振りかえり」に臨む。このようなルーチンを作った。

毎回のスライドは数枚から10数枚で、春学期終了時には合計159枚になった。スライド教材は実習生の要望により、回ごとに1つのファイルにまとめるのではなく、前回までのファイルに新しいスライドを追加していくという方法でまとめた。これにより、実習生は最新ファイルだけを見れば、過去の「振りかえり」も容易に検索、参照することができる。

5. おわりに

4章において、なぜ「振りかえり」のために作成したスライド資料を取りあげたのか。それは、学期末に提出されたレポートに「そのときはわかったつもりだったが、あとで「あれはこういうことだったのだ!」と改めて気づいた」といった記述が、例年以上に多かったからである。そこには、根拠としてスライド教材や「フォーラム」にあらわれた記述が数多く引用されていた。通常時のディスカッションによる「振りかえり」は文字として残らない。しかし、LMSに集約されたことでアクセスが容易になり、時間を越えた考察を推進したのではないか。この意味において、スライド資料は実習生の「学び」の質に大きく影響を与えた可能性がある。

注

- 1 グループ活動などを他の実習生がサポートすることもあるが、すべて主担当者の指示、依頼によって動くのを原則とした。
- 2 実は、このようなスケジュールを立てた時点では、「学期後半には対面授業ができるようになるかもしれない」という一縷の望みがあった。そのこともあり、「話す」を後半に回した。

(こばやし みな 早稲田大学大学院日本語教育研究科)